工事関係者に聞きました。
松陰が入ったと伝えられる浴槽は特殊な構造 !?

工事関係者から説明を聞く様子

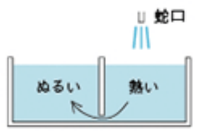
今回工事と工事管理を担当した小川組代表の小川聡之介さん（写真中央）と石川薫さん（写真左）にお話を聞きました。実は、前回23 年前の工事を担当したのは小川さんのお父さん。親子２代に渡って工事を担当することは小川さんにとって感慨深かったそう。それゆえ、力が入っていると熱い眼差しが印象的でした。

今回は屋根の葺き替え、浴槽の付け替え、竹垣の付け替えの３つの工事が行われましたが、それぞれに日本の伝統的建築技法が活かされている事がわかりました。

改修した浴槽を真上から見下ろす。

工事後の浴室の様子

浴槽の間仕切りの下部には穴が空いていて、２つの浴槽で温度調節をしていたそう



浴槽の断面イメージ

古い浴槽を取り除いた状態

工事後

先人の知恵が光る浴槽

お話を聞いていて印象的だったのが浴槽工事。今回、古い浴槽を取り外す事で見えてきた先人の知恵がありました。使用されていたのは松材（浴槽に使用）で、浴槽の周りを厚さ 20cm の砂利が取り囲んでいたそう。この砂利の層で土中に熱を逃がさないのと同時に浴槽の保温層を作っていました。湯船（浴槽）から溢れ出たお湯が緩い勾配で排水される仕上げは職人泣かせの工事だったと言います。
（注）浴槽について、建築当初から同じ施工方法だったかは不明。

職人さんに聞きました。
大変だったことは何ですか？

何でも聞いてよ！

今回の工事は、色々な職人さんの仕事が組み合わさることで成り立っています。
そこで、それぞれの職人さんに大変だったことを聞いてきました。

まずは茅葺き職人さん。大変だったことは材料（茅）の確保。というのも、寓寄処に使用する茅は大量に必要で、あらかじめ秋に収穫しておかなければいけないそう。ですが、下田の茅を集めることは困難だったため、わざわざ御殿場から運んできたそう。また、茅はものによって長さが違うため、屋根を葺く前に茅の長さを決めたり、茅の厚さやバランスを過去の資料や図面と照らし合わせながら工事をしたりと、こちらも大変だったそうです。

造園職人さんが大変だったのは、竹垣のてっぺん（傘）部分。道に沿って湾曲していた竹垣の傘を、どうやって湾曲させようかと皆で色々な方法を話し合ったそう。話した案をひとつずつ検討していった結果、１ 本の竹を曲げるのではなく、30 ㎝程度の竹を切り出して少しずつ曲げていく方法をとったそうです。

大工さんが大変だったのは、浴槽工事。職人泣かせの排水工事以外にも、昔ながらの構造を調査した上で作るため、その材料である釘についてもわざわざ京都から取り寄せたそうです。また、寓寄処は文化財のため、その価値を損なうことなく工事することが一番大事。ということで、工事前に寓寄処の寸法や材料、工法を調査しながら少しずつ解体していったそうです。この調査をきちんとすることが、寓寄処の価値を守ることに繋がるため、とても神経を使ったそう。

こうして改めて聞くと、それぞれの職人さんが苦労を重ね、この工事に取り組んでくれていたことがわかりますね。

左上写真：小屋裏の屋根組（工事時）　左下写真：改修工事前の寓寄処　右写真：改修工事を終えた茅葺屋根。

寓寄処の管理人・長谷川直子さんに聞きました。
子どもの頃に寓寄処に住んでいたって本当 !?

長谷川直子さんとのインタビューの様子

寓寄処が県指定文化財になったのは昭和 16 年。長谷川さんのお母さんは寓寄処の生まれ。県指定文化財になった後も、幼少期には寓寄処の離れに住まわれていたそう。当時は家の半分を見学スペースとして、もう半分を住居にしていたんだとか。その後、昭和 55 年に下田市に建物を所有権移転しました。

管理人の長谷川さんは、今回の工事のことを「皆さんのおかげで綺麗になってうれしい」、「吉田松陰先生は 1854 年（嘉永７）に寓寄処近くの上の湯（共同湯）に皮膚病を治すために訪れました。そこで村山行馬郎と出会い、寓寄処にお連れしました。そのやりとりと距離感をここに来て感じて欲しい。ぜひ、お越しください」と言われていました。

長谷川さん所有の昭和初期の寓寄処写真

生まれ変わった寓寄処に来てください。
私がご案内します。

【期間限定】吉田松陰寓寄処無料公開

今回の改修事業を記念し、期間限定で無料公開を行います。期間は今年８月１日から９月 30 日までです。期間中は改修工事の様子をパネルで展示します。

【対象者】下田市民・市外見学者
【公開時間】午前９時より午後５時　休館日：毎週水曜日